

北海道十勝地方における オジロワシとオオワシの分布¹

日本野鳥の会十勝支部²

はじめに

オジロワシ *Haliaeetus albicilla* とオオワシ *H. pelagicus* は、十勝地方でも冬には海岸沿いや大きな川沿いに飛来することが知られている。しかし飛来する範囲や生息数に関する資料は非常に少なく、これまでに北海道教育委員会(1979)の報告があるにすぎない。オジロワシ・オオワシ合同調査グループ(1982)は、1980年以来冬に北海道東部に生息するオジロワシとオオワシの一斉調査を行っているが、十勝支部も1982年からこの調査に参加し、十勝地方の調査を受けもった。この報告では、一斉調査と会員がこれまでに得た資料にもとづいて、オジロワシとオオワシの分布と生息数などについて述べる。

調査地と調査方法

一斉調査は、十勝地方の海岸線と十勝川の河口から帯広付近までで行い、海岸線ではワシ類がよく見られる河口や湖沼に重点をおいた。なお黄金道路(国道236号)の一部とえりも岬は行政区分上日高支庁管内であるが、十勝の海岸に続くこの部分も、今回の調査対象地に加えた。これ以外の随時に行った調査では、上記のほか十勝川の支流である音更川、利別川、札内川などの川沿いでも観察した(図1)。

一斉調査は1982年2月14日、4月4日、1983年2月13日に行い、各調査日とも原則として9:00~9:30に種、個体数、成若別を記録した。ただし長い区間を少数の調査員で調べた場合には、調査が11:00ころまでかかることもあった。成若の区別は、合同調査グループの調査実施要綱に従い、成羽の個体を成鳥、それ以外の個体を若鳥とした。一斉調査以外の記録は1975~1983年に得られたものである。

調査員と記録提供者は次のとおりである。高木則幸、飯嶋良朗、井口秀司、伊藤篤二、小野登志和、川辺百樹、小林茂雄、桜井康雄、志村国昭、高倉功、土田光子、徳永晃、中村博、永山盛敏、野崎朝治、平沼裕、藤巻裕蔵、藤巻佳枝、宮嶋浩路、村上寿之、室瀬秋宏、山田由紀江、若杉節。このほか資料として、正富ほか(1978)、北海道教育委員会(1979)の報告も用いた。

一斉調査以外では個体数を調べていない場合があるので、記録回数を用いた。出現する個体数に関係なく、ある所で1日間に1回以上観察されれば、これを1回の記録とした。

1983年8月1日受理

1. 執筆者：藤巻裕蔵、〒080 帯広市稲田町西2線13
2. 〒080 帯広市稲田町帯広畜産大学野生動物管理理学研究室内

結果と考察

1. 生息期間

オジロワシは9月中旬に海岸沿いに飛来し始め、12月にはいと川沿いでも観察されるようになった。海岸でも川沿いでも、2、3月には記録回数が多くなり、海岸では記録回数の40%、川沿いでは64%が2、3月のものであった(表1)。3月下旬から4月上旬にかけては記録回数も減少し、大部分は渡去したと思われる。5、6月に観察されることがあったが、少なく、7、8月には観察されなかった。

表1 オジロワシとオオワシの海岸沿いと川沿いにおける月別記録回数
Number of records of *Haliaeetus albicilla* and *H. pelagicus*
along seashore and rivers by month.

		Jan.	Feb.	Mar.	Apr.	May	June	July	Aug.	Sep.	Oct.	Nov.	Dec.	Total
<i>H. albicilla</i>	sea-shore	9	12	12	7	4	3	0	0	2	2	5	4	60
	river	9	15	16	7	1	0	0	0	0	0	0	2	50
<i>H. pelagicus</i>	sea-shore	2	4	2	4	0	0	0	0	0	0	0	1	13
	river	2	0	1	4	0	0	0	0	0	0	0	2	9

オオワシは海岸でも川沿いでも12月中～下旬から飛来し始め、4月下旬まで見られた(表1)。しかし4月中旬と下旬には、海岸沿いの生花苗沼でそれぞれ1回ずつ観察されただけで、4月上旬ごろには渡去するようである。

2. 分布

オジロワシは、9～11月には海岸沿いにある湧洞沼や生花苗沼によく飛来する。とくに湧洞沼ではよく見られるが、ここは鳥獣保護区で、秋から沼が結氷するまで、カモ類をはじめ多くの水鳥が生息する所である(正富ほか1978)。12月にはいと湖沼の水面は結氷しはじめる。オジロワシはこのような所でも見られるが、厚内、大津(十勝川河口)、美成(当緑川河口)、更生(歴舟川河口)、広尾など開水面のある河口部でよく見られるようになった(図1)。また川沿いに内陸にも飛来するようになった。観察例は十勝川沿いの帯広付近、十勝川温泉付近(河口から40～50 km, 以下同様)が多かったが、十勝川では芽室(60 km)、札内川では大正(64 km)、音更川では北昭和(60 km)くらいまでが内陸での飛来範囲である。南部の歴舟川沿いでは日方(10 km)くらいまで飛来した、内陸では川沿いから離れた所を飛翔中の個体が観察されることがあるが、いずれの場合も川から1～4 kmの範囲であった。このほか、利別川の仙美里ダム湖(72 km)、利別川の支流

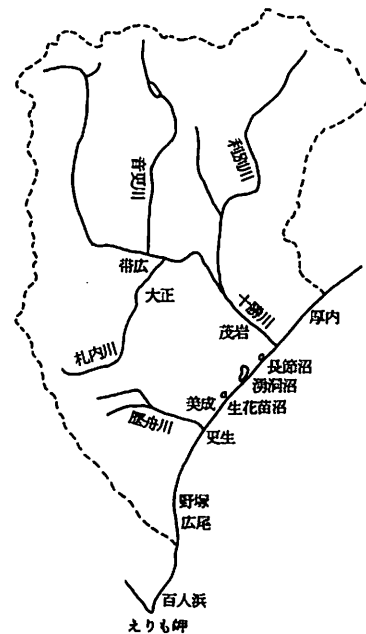


図1 調査地
Map of the study area.

である居辺川沿いの東居辺 (70km), 十勝川上流のトムラウシ二股 (120km) でそれぞれ1回づつ観察記録があるので, ときどきかなり上流域まで飛んでゆくようである. 5~6月の記録は8回あるが, このうち1回は帯広付近におけるもので, あとはすべて湧洞沼におけるものであった. この沼の湖岸では1975年ころまでオジロワシが営巣していた記録があるが (北海道教育委員会 1979), これ以降われわれの観察では営巣している様子は認められなかった.

オジロワシが飛来する場所のうち, 音更川の北昭和には養鶏場があってときどきニワトリの死体が捨てられ, 札内川の大正では一度ウシの死体が放置されていたことがあり, オジロワシはそれらを餌としていた. また美成ではごみ捨て場に飛来し採餌していた.

オオワシは海岸沿いと, 内陸でも海から近い所で観察されることが多かった (図2). 海岸沿いでは湧洞沼や生花苗沼, 大津, 美成, 更生, 野塚川河口, 広尾, 黄金道路, 百人浜などである. 川沿いでは十勝川, 札内川の帯広, 幕別付近まで飛来したが, 川沿いの記録9例のうち5例は河口近くか, 十勝川沿いの茂岩, 旅来のように河口から18km以内の所であった. オジロワシの場合に比べて, オオワシでは海岸での記録が多く (表1), オジロワシほど内陸にははまらないようである.

3. 個体数と年齢構成

1982, 1983両年の冬の一齐調査では, オジロワシは6~11羽, オオワシは1~2羽であった (表2). 一齐調査をふくめ, 個体数を記録した観察例は, オジロワシでは93例, オオワシでは16例ある. 1回に同時に観察された個体数は, オジロワシでは1羽の場合が58例

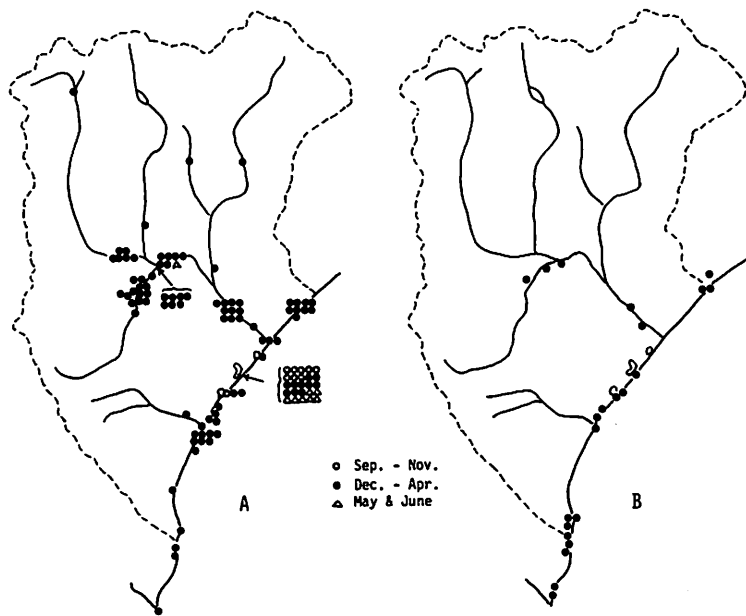


図2 十勝地方におけるオジロワシ(A)とオオワシ(B)の分布.

1点は1記録 (本文参照)を示す.

Distribution of *Haliaeetus albicilla* (A) and *H. pelagicus* (B) in the Tokachi District. One point indicates one record of bird.

(63%), 2羽18例(19%), 3羽12例(13%), 4羽3例(3%), 5羽2例(2%)で、6羽以上の例はなく、一斉調査で数えた11羽を越えることはなかった。なお3羽以上の例は1~4月に見られた。一方、オオワシでは1羽の場合が10例(62%), 2羽4例(25%), 8羽と10羽が1例(6%)ずつであった。8羽は1980年4月17日に生花苗沼で、10羽は1981年3月29日に歴舟川河口での記録で、いずれも一斉調査で得た数より多かった。

調査地全域のワシ類の個体数は、一斉調査以外では明らかではないので、記録回数(表1)から季節変化の動向をみってみる。飛来ははじめの9~10月の記録回数はあまり多くなく、11~12月にやや多くなり、2~3月には1年中でもっとも多くなった。その後4月から再び減少した。また1ヵ所で同時に見られる個体数は9~11月には1~2羽であったが、1~3月には4~5羽のこともあった。これらのことを総合して考えると、オジロワシは秋から冬にかけては主に海岸におり、その数は少なくとも1~2羽である。12月になると内陸にも飛来するようになり、2月には海岸と川沿いで6~11羽が数えられたが、その後は減少し、5~6月には海岸沿いの湖沼で1~2羽が生息していた。オジロワシ・オオワシ合同調査グループ(1982)が1980, 1981両年の冬に行った調査によると、網走から釧路に至る北海道東部の海岸で1月下旬から2月中旬にかけてワシ類の調が増加している。同グループが1982年の冬に行った調査の中間まとめでは、十勝地方もふくめた東部海岸で、ワシ類の数は2月中旬の383羽から4月上旬の95羽に減少した。十勝地方のオジロワシの個体数の季節変化も、北海道東部に渡来するワシ類の数の変化と関連し、同じような季節変化を示している。一方、オオワシでは、全体に記録が少なく、12~4月の間にオジロワシの場合のような季節変化を示さなかった。

一斉調査ではオオワシよりオジロワシが多く、記録回数でも同様の傾向がみられた。このことは、オジロワシの方が多く、しかも冬の生息状況が安定していることを示している。前述の北海道東部海岸における1980, 1981両年の冬の調査結果では、オジロワシよりオオワシが多かったが、この点は十勝地方における状況と異なっている。十勝地方の海岸で、一度に8~10羽も観察されたオオワシは、短期間だけ東部から飛来したものであろう。

年齢構成については、成、若を記録した観察をそのまま合計して、成若比を出した(表3)。オジロワシではどの時期をみても、観察例数が少なく、成鳥と若鳥のどちらが多いともいえない(X^2 検定, $p < 0.1$)。ただ、5, 6月に成鳥が観察されたことは、今後十勝地方での営巣の可能性を考える上で興味深い。オオワシでは若鳥の方が多かった($0.02 < p < 0.05$)。1980, 1981両年の冬の北海道東部海岸における調査では、オジロワシ、オオワシとも成鳥の割合が高く(オジロワシ・オオワシ合同調査グループ 1982)、この点は十勝地方における年齢構成と異なっていた。

表2 一斉調査におけるオジロワシとオオワシの個体数
Number of birds of *Haliaeetus albicilla* and *H. pelagicus* in simultaneous counts.

	<i>H. albicilla</i>				<i>H. pelagicus</i>			
	seashore		river		seashore		river	
	ad.	juv.	ad.	juv.	ad.	juv.	ad.	juv.
Feb. 14, 1982	4	5	0	1	0	0	1	1
Apr. 4, 1982	4	5	1	1	0	0	1	1
Feb. 13, 1983	0	0	5	1	0	1	0	0

表3 オジロワシとオオワシの齢構成
Age structure in *Haliaeetus albicilla* and *H. pelagicus*

	<i>H. albicilla</i>		<i>H. pelagicus</i>	
	ad.	juv.	ad.	juv.
Sep.—Nov.	2	3		
Dec. & Jan.	7	12	}	3
Feb. & Mar.	45	33		
Apr.	3	9		
May & June	2	0		19

要 約

- 1975～1983年に十勝地方におけるオジロワシとオオワシの分布について調べた。
- オジロワシは9月には海岸に飛来し、12月からは川沿いに内陸にも飛来する。数は2、3月に多くなり、6～11羽が数えられたが、4月以降は減少した。5～6月まで少数が海岸沿いの湖沼に生息していた。
- オオワシは12月～4月に1～2羽が主に海岸沿いに飛来し、オジロワシほど内陸にはいない。まれに8、10羽が飛来することがあった。
- オジロワシの成鳥と若鳥はほぼ同数であったが、オオワシでは若鳥の方が多かった。

引 用 文 献

- 北海道教育委員会 1979 オオワシ・オジロワシ特別調査報告書. 北海道文化財保護協会, 札幌.
 正宮宏之・藤巻裕蔵・川辺百樹・橋本正雄・中田千佳夫 1978 湧洞沼及びその周辺の鳥類相.
 野鳥生息環境実態調査報告書, 湧洞沼, 43—76.
 オジロワシ・オオワシ合同調査グループ 1982 オジロワシ・オオワシ一斉調査報告書. 根北郷
 土研究会合同研究会, 斜里.

Distribution of White-tailed Eagle *Haliaeetus albicilla* and Steller's
Sea-Eagle *H. pelagicus* in the Tokachi District, Hokkaido

Tokachi Chapter, Wild Bird Society of Japan

Observations were made on *Haliaeetus albicilla* and *H. pelagicus* in the Tokachi District, Hokkaido, from 1975 to 1983. *H. albicilla* began to appear along the seashore in mid-September in this area. They occurred mainly around Lake Yudo (protection area) from September to November. When lakes were frozen over in December, they occurred around the mouth of rivers and in inland areas along rivers. They were fairly common in February and March, with 6 to 11 birds counted in February. From late March they began to decline in numbers. One to two birds were observed around Lake Yudo in May and June. *H. pelagicus* occurred mainly at the seashore from December to April in this area. Although this species also appeared in inland areas along rivers, they did not come flying so far from the sea as *H. albicilla*. One to two birds were normally counted in February, though rarely 8 or 10 birds were observed.

Laboratory of Wildlife Resource Ecology, Obihiro University of Agriculture and Veterinary Medicine, Obihiro 080